

平成26年度 学校評価実施報告書

学校名(東山泉小中学校)

3 2回目評価

| ・重点評価項目について評価・改善していくための個別評価項目の設定 ・各項目にねらいを定めた取組の計画・実施 ・取組結果を検証するためのアンケート項目や各種指標の設定 | | | | | | 自己評価 | | 学校関係者評価 | |
|--|-------|---|--|--|---|---|--|------------------|--|
| | | | | | | 評価日 | 平成27年2月26日 | 評価日 | 平成27年3月6日 |
| | | | | | | 評価者・組織 | 1st/2nd合同運営委員会 | 評価者(いずれかに○) | ○学校運営協議会 学校評議員 |
| 分野 | 評価項目 | 自校の取組 | アンケート項目・ 各種指標 | アンケート結果・ 各種指標結果 | | 分析 (成果と課題) | 自己評価に 対する改善策 | 学校関係者評価に よる意見 | 学校運営協議会・学 校評議員による改 善に向けた支援策 |
| 1 | 確かな学力 | 基礎的汎用的能力の伸長を旨とした授業づくり 論理的思考力の育成を旨とした言語活動の推進 家庭学習の習慣化と、学ぶ意欲の向上 | 学習指導要領に基づく指導案作成と公開授業 東山泉としての言語活動と論理的思考力の定義化につながる授業展開 校内における自学環境の整備と、家庭学習に繋がる自学ノートの充実 | キャリア教育を通して伸長を図る基礎的汎用的能力の重要度と達成度 自分の意見や思いを正しく伝えるために筋道を整え考えをまとめる力の必要 家庭学習の実現度は西学舎の認識が70%を超え、東学舎より少し高い。 | ⇒ | ・学力向上への関心は窺える。基礎基本の習得から、活用への認識は一定感じるが、探究の概念がどこまであるかは疑問。 ・論理的思考力をつけたい力とした言語活動の充実が教員には定着しつつある。 ・家庭学習の質的向上のため、学ぶ意欲を重視する必要がある | ・基礎的汎用的能力の具体例の周知が必要か。またその手段について検討したい。 ・本校が捉える論理的思考力のintake・thinking・outputの3要素をもとにした授業における単元構想を深化させる。 ・受動的な課題と能動的な課題の意識化、また学齢による家庭学習のあり方の提示。 | ⇒ | ・授業参観のあり方を工夫することが必要。 ・学習に向けての目標を自ら立て管理できるようになってきている。 ・小中一貫、5-4制の成果の公表が必要。 ・西学舎・東学舎での時間をずらした同日開催、泉だよりやHPを活用し参観の意図を明確にするとともに子供の反応を保護者に知らせるべき。 ・1年で成果を図るのは拙速継続して取り組んで欲しい。"学び支援部会"として放課後まなび教室を支援。 |
| 2 | 豊かな心 | 人権教育の視点にたった道徳教育の充実 道徳主任を中心とした道徳授業の充実 9学年を繋ぐピアサポート活動の充実 | 道徳教育推進教師を中心に、子どもたちが楽しく学べる学校づくりの推進 年間35時間の道徳授業の充実と、実践的態度の育成 縦割り活動の有効性を引き出すお世話活動の実施 | 道徳教育の要としての学級での道徳授業、学年道徳、ステージ道徳 シラバスに基づいた各学年の実施状況の点検と学習内容 学校行事や日常の取組での異学年交流と縦割り集団活動 | ⇒ | ・道徳教育推進教師とは別に道徳主任が、その役割を果たすことができた。 ・各学年の道徳授業の実践と充実は一定の成果が見られた。 ・既存の取組を生かしてピアサポートを意識した活動にすることができた。 | ・道徳の教科化に向け、改定された学習指導要領の趣旨を次年度のシラバスに反映させる。 ・道徳授業を要に東山泉の道徳教育の独自性を方向性を検討する。 ・固定学年によるバティによる取組の実践と、ふり返りと評価を自己有用感の醸成に繋げる。 | ⇒ | ・川崎の事件など、今後も学校・家庭・地域の連携の強化が必要。 ・教科の授業参観だけでなく道徳や総合の参観は意味が深い。 ・ピアサポートの充実を望む。 ・自治会活動を基盤に少年補導委員会、民生児童委員会、保護司会等の連携、協働をより強くしていく。 ・道徳の授業参観では保護者も発言するなど、それぞれの考え方を理解していく。 ・ピアサポートの事後指導(お礼を言うなど)で自己有用感を高めていく。 |
| 3 | 健やかな体 | 自律心の育成と基本的生活習慣の確立 生涯にわたって運動に親しむ資質と能力の育成 | 環境教育、食教育の充実と、学齢に即した自律の実践力の育成 小学校課程でのクラブ活動、4年生からの部活動の充実 | 朝食の摂食、起床就寝、自己管理等、基本的生活習慣の点検 クラブ活動、部活動実施状況の点検と、児童生徒の活動状況 | ⇒ | ・学齢があがるにつれて朝食喫食率が低下。 ・中学校課程での食育の実践が不十分。 ・6年生の部活動スタイルが確立できた。 | ・朝食をおろそかにする児童生徒への家庭への働きかけの強化。 ・味覚指導に主眼をおいた食育の検討。 ・児童生徒の負担過多とならない部活動のあり方を考える。 | ⇒ | ・体育大会の9学年合同開催に対する記述には必要な部分の改良が必要。 ・児童・生徒が身体を動かす場面が減ってきている。 ・体育大会の形式は賛否両論があるが、必要な改善をしながら継続すべき。1年でコロコロ変えるべきではない、見守っていく。 ・社会体育、体育振興会等と連携した支援に努める。 |
| 4 | 独自の取組 | 5・4制施設併用型小中一貫教育の推進 「ゆめづくり・夢創」(総合的な学習に時間)の推進 3小学区に渡る地域連携 | 小と中、学び、二つの学舎等、様々な繋ぎの工夫と実践 3年生からの7学年を系統立てたカリキュラムの編成と実践 開校までの統合協議会を構成する地域各種団体との連携強化を図る | 東西学舎の交流の重要度と実現度 シラバスにおける7年間の系統性と学習計画の重要度と実現度 学校行事、登下校時の安全対策等に関わる地域連携の状況確認 | ⇒ | ・東学舎を拠点としつつ6年生の西学舎での学びの場を確保した。 ・「ゆめづくり・夢創」のシラバスの再検討が必要。 ・地域の新たに開校した学校への期待を実感した。 ・交通安全に関する、地域、保護者・学校の連携のあり方に課題が見えた。 | ・2年目は6年生の西学舎への移動頻度を減らし、5年生の交流頻度を高めた。 ・「ゆめづくり・夢創」の各学年での取組の柱を全体で共通理解し、7年間の系統性を高める。 ・交通安全対策の3学区の独自性を尊重し調整を図る必要がある。 | ⇒ | ・英語に関して親でいて楽しい。子供が家で英語について話す機会が増えた。 ・5-4制で中1ギャップの解消を図れたのか新年度を主目したい。 ・HPIは活用されている。 ・学校運営協議会でも1年目の課題を検討しながら、長い目で見守っていく。 ・地域行事で子どもが活躍し、自己有用感の向上につながる場面をつくる。 |

4 総括・次年度の課題

・3小1中学が統合し、小中一貫教育校として開校し1年が経過しようとしているが、施設併用型の学校として東西学舎をそれぞれ総括すると、西学舎は3小統合の課題、東学舎は6年生児童を迎えた学年増と小中接続の課題があったが、東山泉小中学校として、学校教育目標、めざす子ども像、校是由るコンセプトを教職員が共有することにより、開校前の構想、計画に関しては概ね遂行することができた。
・H27年度は開校2年目として初めて、東学舎で1年間過ごした6年生が、学びの連続性をもって7年生に進級することで、いわゆる「中1リセット」をしない小中接続となり、小中一貫教育校の一つのメリットの検証ができると考える。
・東学舎においては、H27年度は7年生で1学級増、6年生1組(育成学級)に4名の児童を迎えることでの1学級増となり、各学年において学年主任による学年経営構想のもと、種々の取組の推進に努めたい。
・初年度に引き続き、全教職員で進める研究体制をとり、言語活動の充実による論理的思考力の育成、グローバルな視点で捉える英語力強化研究推進、自己管理能力を高める健康教育推進、生き方探究館との共同研究等の推進に努める。